ポスター発表P⑩　13:00～14:00

質問作りの実践報告

― 主体的な学びのために ―

ギュンター　知枝
徳島大学教養教育院　非常勤講師

1.　実施年月日など

実施日：２０１５年１０月２７日
対象学習者：医療系学科１年生３２名
授業名：ドイツ語入門

2.　目的

・動画に字幕をつけるスマートフォンアプリケーションを学生に紹介し、ドイツ語で字幕を付けさせることで「日本紹介」などに使える１つのツールの使い方を習得させるにあたり、「質問作り」をすることで、動画の内容を明確にし、動画作成がスムーズにできるようにする。
・「質問作り」を実践させ、その効果を実感させることで学校では教えてもらわない質問の作り方を学び、語学だけでなく全ての学習において自分が本当に知りたいことは何かを自分で考えられるようにし、自ら疑問を持って取り組むきっかけを与える。

3.　背景

作文のための作文では文法項目を練習することはできるが、学生も、それが練習のためであってそれ以外の目的が特にないことがわかっているため、高いモチベーションは望めない。したがって、複雑な文にチャレンジさせると、「難しい」というイメージばかりが強くなる。

しかしながら、動画の字幕作成だとまず自分が好きな表現したい内容があり、それをどうやってドイツ語にするか、という順になるので、その結果複雑な文を作ることになっても、それが必要であったと感じることができる。

また、何かを説明するために動画を作成したという経験を、将来のコミュニケーションに活かしてほしいと意図した。

グループごとにオリジナリティーのある内容にするにはどうしたらいいか考えた結果、動画を作成する前に「質問作り」から内容のヒントを得させることにした。

4.　「質問作り」とは

「質問作り」とは、自らの質問を作り出す方法を学ぶことで、学習者が主体的な学び手・考え手になる機会を提供する方法。Dan Rothstein と Luz Santana 両氏が考案した。

手順は以下の通り。

① 「質問の焦点」は質問作りの鍵となる、学生たちが質問を考えだす起点となる言葉や文章のことで、教員によって事前に設定される。
② 質問を作る際の簡単な４つのルール（できるだけたくさん質問する/質問について話し合ったり、評価したり、答えたりしない/質問は発言の通りに書き出す/意見や主張は疑問文に直す）が提示され、学生たちはどのルールが一番守るのが難しいかとその理由について話し合う。
③ ルールを意識しながら短い時間でできるだけたくさんの質問を考えだす。
④ 「閉じた質問」と「開いた質問」の違いを理解した上で、それらを相互に書き換える。
⑤ 練習をする。

⑥　質問を作る際の簡単な４つのルール（できるだけたくさん質問する/質問について話し合ったり、評価したり、答えたりしない/質問は発言の通りに書き出す/意見や主張は疑問文に直す）が提示され、学生たちはそれについて話し合う。

⑦　ルールを意識しながら短い時間でできるだけたくさんの質問を考えだす。

⑧　「閉じた質問」と「開いた質問」の違いを理解した上で、それらを相互に書き換える。

⑨　優先順位の高い質問を１つから３つ選択する。

⑩　優先順位の高い質問を使って、教師と学生で次にすることを計画する。

⑪　学生は、ここまで学んできたことを振り返り（「学んだことは何か？」「どのようにして学んだか？」「学んだことをどのように応用できそうか？」など）

5.　実施

４人１組のグループに分かれ、上記手順で実施。（「質問の焦点」である「徳大看護学生の悩み事」を板書して提示。）手順のうち②、④、⑤、⑥についてはプリントを配付し、書き込みながら作業ができるようにした。（時間がタイトなので、タイムラインを書いた進行表を作成して臨んだ）

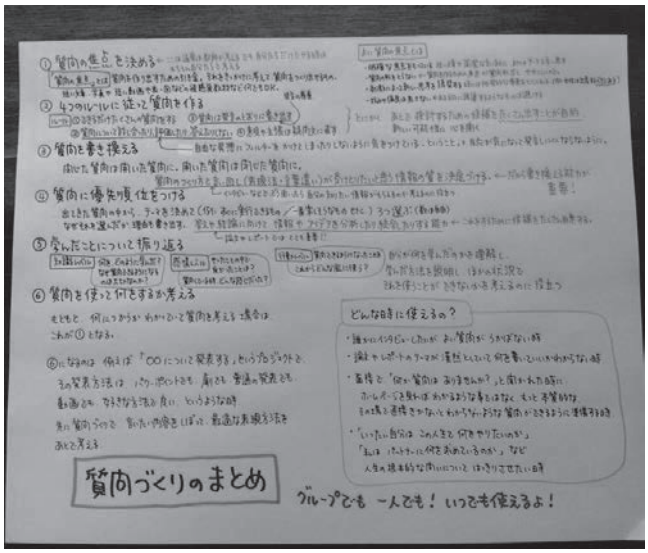
振り返りのプリントの内容をグループごとにまとめて発表。その後、質問作りに関する教員作成のまとめのプリントを配付し、質問作りで最終的に選んだ質問に関連する内容の動画をグループごとに作成するよう指示した。

6.　学生の感想

作業後の無記名のアンケートでは、「同じ出発点からたくさんの違う意見がでて、いろいろな着目点があって面白かった。」「皆で意見を出し合えば自分が思いつかなかったものが生まれるなと感じた。」などの感想が出、動画作成後の後日のアンケートでも「発想が豊かになった」「プランが明確化した」「質問作りで事前に話し合ったからこそ蔵本生ならではの動画ができた」「観る人はどんな情報を求めているんだろうと考えながら作れた」という回答が見られ、回答した３０人中２５人がポジティブな影響があったと回答した。

7.　まとめ

学生は、グループで生き生きと質問作りに取り組んでいて、これをひとつの日常のツールとして活かしていく可能性を感じている様子であった。「質問作り」は、アイデアに行き詰まった時、就職の面接で会社に何を質問したらいいかわからない時など、通り一遍の問いかけでは答えが出そうに無い問題を解決する糸口として、非常に有効なツールである。今後も機会を捉えて広めていきたい。



図：授業終了後に配ったまとめのプリント

参考文献

Dan Rothstein, Luz Santana 共著　吉田信一郎　訳『たった一つを変えるだけ-クラスも教師も自立する「質問づくり」-』新評論，2015 年，ISBN978-4-7948-1016-8